

2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	愛知県立三好高等学校	氏名	油科 里佳
-----	------------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [2586]

幼い少年だけど・・・

靴磨きをしている人の中には幼い子どももいた。私も6歳の少年に靴磨きをお願いした。彼は学校が夏休みの間働いているとのことだった。彼のおかげで私の靴はぴかぴかになった。私も彼の服、靴をぴかぴかにすることができないか。歯がゆさを感じた。



●写真2 [3757]

つながり

日本に届くコーヒーが多くの日本人、エチオピア人の手を経て届いているということを改めて感じた。日本の支援により、現金収入を増やすことに成功したエチオピアの人たちも少なくない。持続可能な社会の実現のためには持っている知識・技術を分け合うことも大切なのだと感じた。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私が研修に参加した目的は2つある。1つ目は途上国を五感で感じることだ。授業で諸課題を生徒が現実味をもって話を聞けるかが、生徒が課題を主体的に考えることに繋がると考える。だから、私が感じたままの姿を生徒に伝えたいと考えた。実際に現地に行き、私は本やネットでは得られない知識を得ることができた。特に現地の人たちの声や笑顔を直接見ることができたことは、生徒に伝える上で大きな鍵になると考える。

2つ目は私がアクションを起こすことで、生徒に積極的に参加することの大切さに気づいてほしかったからだ。ST (ショートタイム) などで見ることや参加することでわかることがたくさんあることを、私の体験を踏まえて伝えることができると考える。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

私が学んだことは、いろいろな角度からその国を見てみないと何も分からない、ということだ。私たちはし

ばしば目の前にある情報だけに頼ったり、第一印象で物事を判断しがちである。私もその1人だった。エチオピアに到着した時、日本とは違う当たり前に驚くことが多かった。私とエチオピアの出会いには肯定的とは言えなかった。しかし、エチオピアでたくさんの人と出会い話をしたり、街をたくさん歩いたりする中で、その国の特徴、他にはない良さが見えてきた。私が思うエチオピアの良さは、その人柄にあると思う。彼らはとても誠実でお世話好きで人懐こい。そして、自分の国に誇りを持っている。また、あるものを工夫して使い、ものを大切にしているように見えた。確かに、エチオピアにはまだまだ改善の余地がある部分もあるだろう。しかしこの国らしさ、良さを忘れずにいてほしいなと思った。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

私が一番繋がりを感じたのは、JICA のコーヒー農家支援においてだ。エチオピアに行き、森林で働きながらコーヒーを見守る人、その技術支援や販売システムの構築をサポートするスタッフなど、様々な人の手を通じて私たちのもとに届いていることを、身をもって体感した。日本に帰ってきて数日経つが、コーヒーを見る度に一人ひとりの顔が思い出される。そして、今まで贅沢ができなかったエチオピアのコーヒー農家の人たちの豊かになった生活を思い出す。コーヒーを大切に飲みたいと思うし、もっとたくさん飲みたいと思う。私にとってとても思い出のあるものになった。エチオピアにある価値ある商品を、日本が発掘しエチオピアの発展の糸口を見つけ、達成している。遠く離れていても、エチオピアと日本の繋がりを感じた瞬間だった。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

私はエチオピアでともに目標をもち、課題解決に向けて文化の壁を乗り越えて交流することの素晴らしさを学んだ。私が出会った JICA の専門家、青年海外協力隊の皆さんに共通していたのは、一緒に歩もうとする姿勢だ。確かに日本は技術力も高く、歴史上の背景から様々な事柄に対するノウハウも持っている。彼らはおごることなく、彼らに寄り添い、彼らの文化に自分たちの文化を少しミックスさせる形での支援を行っていた。これはどんな課題に対しても言えることだろう。上下など存在しない。正解なんてないのだ。互いに自分の中で揺るがないポリシーをもつことはとても大切である。また、お互いを尊重し合い、目標こそ違えど、同じ方向に向かって歩んでいく柔軟な姿勢こそ、世界共通の課題解決には必要だと考えた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

必要な場所に必要の支援を行うことはとても良いことだと思った。何より現地で働く JICA の専門家、青年海外協力隊の皆さんが現地の生活、文化、思想に寄り添い、それぞれがポリシーを持ちながら、そして自らの専門性を活かしながら、目標を達成しているところは本当に素晴らしいと思った。

今後あるといいなと思うのは、現地の人たちが自分たちで気づけていないニーズを掘り起こすことだ。既に行われていることではあるが、現地の人と密接に関わり、彼らの常識を良い意味で覆すことが、彼らの生活をより良いものへ変化させていくと考える。日本での当たり前は世界での当たり前ではない。エチオピアでもたくさんそのような現場を見てきた。日本が1番良いとは思わないが、彼らにとってより良い当たり前を作り上げていくことも彼らの生活を向上させる1つのきっかけになると考えた。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

⑤ 品質・生産性向上(カイゼン)普及能力開発プロジェクト(エチオピアカイゼン機構、カイゼン導入の製薬工場) [鈴木/油科]

カイゼンの学校カリキュラムへの導入を検討していることに驚いた。エチオピアではカイゼンフィロソフィを根付かせる取り組みが行われている。カイゼンや5Sが行われることで100億円ほどのコストが浮くこと

もあると言われている。エチオピア内でも複数の企業が整理・整頓を実践している。私は日本の考えが海外に認められることをとても誇りに思う。しかもそれによって、コストを浮かせるという功績を残し、更には学校現場にまで導入されようとしているのは誇らしいことだと考えた。まさにエチオピアの文化と日本の文化の融合である。他のリソースを柔軟に取り入れることが、より良い社会の実現に繋がるのだと感じた。(油科)

⑦ 2000 Habesha Cultural Restaurant (エチオピアの料理と伝統ダンス) [油科/加藤]

伝統ダンスには圧巻だった。表情豊かでたくさんほほ笑みかけてくれた演奏隊の男性たち。その弦楽器とドラムでの生演奏をバックに、いろいろな衣装を身にまとった男女が陽気に、時にセクシーに、激しく踊っていた。特に女性の肩や頭を回すダンスは、激しさと品の良さを兼ね備えており、素敵だなと思った。音楽は曲によっては日本の演歌を思わせるようなゆったりした曲もあった。また、前評判があまりよくなかったエチオピア伝統料理のインジェラだが、ほのかな酸味と独特の食感が私の口には合い、美味しくいただいた。インジェラと共に食べるワットも種類が豊富で、いろいろな味を楽しむことが出来た。やはり何事も経験してみなければ、真実は分からないと思った。(油科)

⑩ 青年海外協力隊(環境教育/観光)活動+⑪ インジェラ体験教室+8/11 ハチミツ屋 [吉田/油科]

バルタにあるガーネットさんの家は、ユーカリの柱と赤土とテフで作られていた。中は少しジメツとしていたが、涼しく感じた。インジェラはテフの粉を水とまぜ、数日間発酵させた後、お湯を入れてさらに混ぜ合わせ発酵させたものを焼いて作る。発酵したインジェラの生地は、ぶつぶつと泡が立っていた。昔は炭で焚いた火に、インジェラ用の鉄板をのせて作っていたが、今は電気を利用するインジェラ焼きマシンを使っていた。ただ、バルタの電気は安定していないため、他の電気をつけると熱が弱くなり、上手く焼くことができない。生活が便利になったとはいえ、インフラ整備不足による生活への支障もあるのだとわかった。インジェラを焼くのは意外と時間がかかるし、難しかった。ガーネットさんは大家族なので、大きなインジェラを数日分まとめて焼く。とても大変な仕事だと思った。(油科)

⑪ アディスアベバ市内見学(8/10 川見学、8/13 ホーリー・トリニティー大聖堂、8/15 国立博物館など) [鈴木/油科]

アディスアベバ市内で特に印象に残っているのは、ホーリー・トリニティー教会だ。私は、教会を訪れる人の多さに驚いた。エチオピアには敬虔なエチオピア正教徒がたくさんいる。彼らの中には、教会の前を通るたびにお祈りを捧げる人もいる。キャンドルを持ち、教会の地面や壁にキスをする人もいる。多くの人は自分が生まれた後(男性であれば生後4ヶ月、女性であれば生後8ヶ月)に貰ったクロスを身につけている。ファスティングも行う。教会の中は静寂に包まれていた。教会の中には靴を脱いであがった。お祈りの席は、お祈りに集中するために男性と女性で分かれていた。教会の左右の窓に何枚か埋め込まれたスタンドグラスは、エチオピア聖教の神話に基づく。繊細でとても美しかった。エチオピアの文化の一面を垣間見た。(油科)

⑬ 南部諸民族州リフトバレー地域給水計画 [油科/鈴木]

ブタジラの大衆用水汲み施設(水洗台)には、水を汲むための容器のカラフルなジェリカンを持った子どもたちがたくさん集まっていた。家庭の水を確保するのは主に女性・子どもの仕事だ。水の入ったジェリカンはとても重く、大人の私でも1つ持ち上げることが困難だった。子どもたちの中には、それを2つもつ子もいた。JICAの支援により巨大なタンクが設置され、各水洗台に水を供給する仕組みができた。それにより、人々は安全な水にアクセスできるようになっただけでなく、管理のための新たな雇用を生み出したり、メンテナンスを含め長期的に安全な水を受け取り続けるシステムも構築された。彼らが、自身の手で安全な水にアクセスし

続けることができる支援こそ、生活向上の基盤になると感じた。(油科)

⑭ 青年海外協力隊（陸上競技）活動 [加藤／油科]

アディスアベバにあるナショナルスタジアムへ見学に行った。スタジアムでは、普通に世界レベルの選手が練習をしていて驚いた。エチオピアでは村からスカウトされ、世界トップレベルの選手になることが多い。エチオピアの選手は真面目で、陸上競技に命をかけて取り組むから強い。エチオピアでたくさんのお金を稼ぐ方法の一つが、陸上選手になることなのだ。直接選手と話す機会はなかったが、暑い日差しの照りつける中で黙々と練習をこなす彼らの姿から強い意志を感じた。また、スタジアムには椅子がない部分があったり、フィールドが欠けていたりしていた。財政難を垣間見た。(油科)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

（持ち物） ティッシュとウェットティッシュは必須だった。ほとんどのトイレにはティッシュがない。また、エチオピアのお金は衛生的とは言えない。だから、お金を触る度に手を除菌することが、健康を保つ秘訣だと思う。雨季は洗濯物が乾きにくいいため、靴下と紙パンツがたくさんあると便利だと思う。また、足場が悪い場所も歩いので、登山用のレインウェア、トレッキングシューズも役立ったと個人的には思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修で私はたくさんの方々のことを学ばせていただいた。たくさんの方々の協力、支援があったおかげだと感じている。関わってくださったすべての人に感謝の気持ちを述べたい。本当にありがとうございました。ここで学んだことを授業や生徒指導のみならず、自分の生活にも生かしていきたい。

以上